

一 次の1、3の問いに答えなさい。

1 次の — のひらがなを漢字に直しなさい。送りがなが必要なものはそれも書きなさい。

- ① 旅先でしようそくを絶つた友人からの突然の知らせ。
- ② 仲間どうしで新しく店を開く。
- ③ めいろう快活な人物になってほしいという父の願い。
- ④ 仲間を裏切る気持ちなどもうどう無い。
- ⑤ 犯人が誰なのか私にはだいたいけんとうがついている。
- ⑥ 夕暮れの湖面にうつる五重塔。
- ⑦ 重い荷物を運んで体力を使い果たす。
- ⑧ 旅先であついてもてなしを受ける。
- ⑨ 議論を尽くして最終的に決をとる。
- ⑩ 有名選手にフアンがむらがる。

2 次の①、③の文の — のことはの使い方としてふさわしくないものを、それぞれのア、オの中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ① ア 首脳会談を前に、ものものしい警備体制が敷かれた。
イ 看護師は患者を氣遣ってかいがいい言葉かけた。
ウ 雪をかぶった富士山のこうごうしい姿に感動する。
エ そらぞらしいお世辞を言つて、店員が商品を勧めてきた。
オ 小学校の入学式でいういしい返事をする新入生。

- ② ア 難しい問題を抱えていたが、ようやく解決の目鼻がついた。
イ 素人とは思えない彼女のすばらしい演技に、みな舌を巻いた。
ウ 「たまには親孝行しなさい」と忠告されて、耳が痛かった。
エ 困っていたときに助けられて、友人の優しさが身につまされた。
オ 地道な練習のおかげで、彼は陸上選手として頭角を現した。

- ③ ア 住めば都という通り、地方の若者は住むならば都会がいいと言つて上京する。
イ 何度も息子に手紙を送つたが、なしのつづで、一向に返事を寄こさない。
ウ 彼女はいつも尾ひれをつけて話すので、話のすべてを信じてはいけない。
エ やぶから棒に、そんなことを言われても、どう答えていいかわからないよ。
オ どこで油を売っているのか、弟はお使いに出たもののなかなか帰つて来ない。

3 次の①、②の文の [] に、下の三つの語のどれをあてはめても正しい文になるものを、それぞれのア、オの中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ① ア 自由研究で「銀賞」を取つたのを、おじいちゃんだけが [] くれた。
イ 自分勝手な政治家たちに [] 若者たち。
ウ 長く続いたドラマの幕がある日突然 []。
エ 世界制覇の夢を胸に []、選手団一行が羽田から飛び立った。
オ 詩人氣取りの兄は時々、よその土地をひとり [] ことがある。

- ② ア 記者会見は [] 十五分程度だろう。
イ 一輪活けられた白バラの [] 香りが漂う。
ウ [] した性格が際立つ人物の登場。
エ みんなの気持ちはもう [] になった。
オ その件は [] 皆に知らせるまでもない。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

個性を重視する欧米では、子どもたちはこう言われて育つ。「あなたの他の人と違うところはどこなの？」これに対して、日本の子どもたちはこう言われる。「どうして他の人と同じようにできないの？」

日本では、他の人と同じであることが必要以上に求められるのである。あるいは、新渡戸稲造の『武士道』の中で、アメリカ人の新渡戸稲造の妻が驚いたエピソードが出てくる。

暑い日、日本人の女性二人が道ばたで出会う。一人は日傘をさしている。もう一人は日傘を持っていない。すると、日傘をさしていた女性は炎天の下で、日傘を閉じたのである。

自分だけ、涼しい思いをするのは悪い、という日本人にはごく当たり前の感覚だが、アメリカ人の新渡戸稲造の妻には、それが不思議だったという。

傘が大きければ、二人で日傘の下に入れば合理的である。たとえ、一人しか入れなかったとしても二人で暑い思いをするよりは、日傘をさしている人だけでも日蔭に入った方が効率的だ。しかし、二人で暑さを分かちあう、それが日本人なのである。

自分の意見を押し殺しても集団に同調しようとする。しかし一方で協調性を重んじ、集団で力を合わせて行動することに長けている。こうした日本人の気質は、水田稲作によって育まれてきたと指摘されている。

イネを作るときには、集団作業が不可欠である。

すべての田んぼは水路でつながっているから、自分の田んぼだけ勝手に水を引くことはできない。水路を引き、水路を管理することも共同で行わなければならないのだ。そして、自分の都合のいいように勝手なことをすることは、自分の田んぼだけに水を引く意味の「X」と言われて批判されてきた。

さらにイネの栽培も手がかかるので一人ではできない。特に田植えは多大な労働力を必要とする。みんなで並んで揃って田植えをする必要がある。そのため、村中総出で協力しあって作業をしてきた。

力を合わせなければ行いうことができない。こうした稲作の特徴が協調性や集団行動を重んじる日本人の国民性の基にあると考えられているのである。

日本人特有の気質の大きな要因は「稲作」にあると指摘されている。しかし、他人を思いやり、協力し合う日本人の協調性を作り上げてきたのは、稲作ばかりではないだろう。

③ 米は日本人にとって重要な食糧ではあったが、日本を見渡せば水がなく田んぼを拓くことのできない地域もたくさんあったのである。私は日本人の気質を醸成してきたものとして、稲作と共に、度重なる災害があったのだと思う。

日本は世界でも稀に見る天災の多い国である。日本人は長い歴史の中で幾たびもの自然災害に遭遇し、それを乗り越えてきた。

科学技術が発達した二一世紀の現在であっても、私たちは災害を避けることはできない。

毎年のように日本のどこかで水害があり、毎年のように日本のどこかで地震の被害がある。防災技術の進んだ現在でもこれだけの被害があるのだから、防災設備や予測技術がなかった昔の日本であればなおさらだろう。

長い歴史の中で、日本人にとって災害を乗り越えるのに必要なことは何だったのだろう。それこそが、力を合わせ、助け合うという協調性だったのではないだろうか。

東日本大震災のときに、日本人はパニックを起こすことなく、秩序を保ちながら長い行列を作った。そして、被災者どうしが思いやり、助け合いながら、困難を乗り越えたのである。その冷静沈着で品格ある日本人の態度と行動は、世界から賞賛された。

災害のときに、もっとも大切なことは助け合うことである。人は一人では生きていけない。ましてや災害の非常時にはなおさらである。

短期的には、自分さえ良ければと利己的に振舞うことが有利かも知れない。しかし、大きな災害を乗り越えるためには、助け合うことが欠かせない。

くりかえされる自然災害の中で助け合うことのできる人は助かり、助け合うことのできる村は永続していったのだろう。そして、世界が賞賛するような、④ 協力し合って災害を乗り越える日本人が作られたのである。

もちろん、水田を復興し、イネを作るためにも力を合わせなければならぬ。

日本の人たちは、水害で田んぼが沈んでも、冷害でイネが枯れても、地震で田んぼがひび割れても、けつしてイネを作ることを諦めなかった。どんなに打ちのめされても、どんなにつらい思いをしても、変わることなく次の年には種子をまき、イネの苗を植えたのである。励まし合い、助け合いながら、日本人は災害を乗り越えイネを作り続けてきた。

おそらくは度重なる災害が、日本人の協調性をさらに磨き上げた。そして、⑤ その協調性によって、日本人は力を合わせて稲作を行ってきたのではないだろうかと思えるのである。

外に向かわず、内向きな国民性。個人の意見を言わず、個人では判断しない同質集団。このような日本人の気質は、手を掛ければ生産性が高まる日本の田んぼや、力を合わせて行いう日本の稲作によって培われてきた。

ただ一方で、こうした日本人の特徴は、外交的で、個性を尊重する欧米からは理解されずに、⑥ ときに批判を浴びてきた。そして、日本人は批判されるたびに、欧米流のものの考え方を取り入れようと努力してきた。もちろん、集団を優先し、個人を犠牲にしがちな日本人の気質には、欠点もある。

しかし、悪いところばかりではない。

大災害にあったときに、パニックや暴動を起こさずに、⑦ 泣きわめくこともなく、ときには笑顔でインタビューを受ける姿を見て、世界の人々は不思議がった。しかし、日本人であれば、この行動はよくわかる。

もちろん、悲しくないはずはない。大声をあげて泣きたいに決まっている。しかし、それでは相手が悲しい気持ちになってしまう。相手に悲しい思いをさせないために、じつと耐えて、笑顔を見せているのだ。

相手の心に同調して、悲しい気持ちを共有できる日本人。そして、相手の気持ちを慮って笑顔を見せる日本人気質がそこにはあるのだ。グローバル化の時代である。自分の国の欠点は反省し、他の国の良いところは取り入れることはもちろん大切である。しかし、外国をうらやむだけでもいけないだろう。

稲作は大陸から海を越えてやってきた。それ以来、日本では新しいもの、優れたものはすべて海を越えてやってきた。そのため、日本では今でも外国のものをありがたがり、外国の考え方や習慣を取り入れようとする傾向にある。

しかし、日本には日本の良さもある。相手のことを思いやる気持ち。相手に寄り添う心。⑧ 悠久の稲作の歴史の中で日本人が育んできた大切なものは失わずに、むしろ海を越えて世界に伝えていきたい、私はそう思う。

問一 本文中の X にあてはまる四字熟語を、漢字で答えなさい。

問二 ①「それが日本人なのである」とありますが、日本人は辛いことや苦しいことに会おうとどうしていましたか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 同じ困難にある人たちのことを思いやるよりも、周りの人に自分がどう思われるかを心配していた。
- イ なぜそのような困難が起こったかの原因を明らかにするよりも、自分の何が悪かったのかと反省していた。
- ウ 自分一人だけが困難から抜けだすことよりも、周りの人たちとその苦難をともにしていた。
- エ 困難から抜けだすにはどうするかを考えるよりも、自分一人で黙って耐えていくことを優先していた。
- オ 自分で最善だと思うことをするよりも、周りの人たちの行動をそのままねようとしていた。

問三 ②「こうした稲作の特徴」とはどのような特徴ですか。わかりやすく説明しなさい。

問四 ③「米は日本人にとって重要な食糧ではあったが、日本を見渡せば水がなく田んぼを拓くことのできない地域もたくさんあったのである」とありますが、筆者はどのようなことを主張しようとしていますか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 日本人全体に共通する特質である協調性は稲作以外の要因によっても養われたということ。
- イ 日本人の協調性が稲作以外のどのような産業によって育まれてきたのかということ。
- ウ 稲作を可能にするためにより強力な協調性が必要とされる地域があったということ。
- エ 地域によっては日本人の多くに共通する特質である協調性は養われなかったということ。
- オ 日本人の特徴である協調性よりも個人の能力を伸ばすことの方が重要だったということ。

問五 ④「協力し合って災害を乗り越える日本人が作られたのである」とありますが、「協力し合って災害を乗り越える日本人」が「作られた」理由として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 狭い地域でお互いに周りの人々に配慮しながら生活してきたので、周囲の人々と力を合わせて災害を乗り越えることが容易だったから。
- イ 困難を乗り越え稲作を続けてきた中で、団結して行動するという素質を持っていた人々だけしか生き残ることができなかったから。
- ウ 協調性に富む人々の中で自分のことだけを考えていたのでは、周囲の人たちから相手にされなくなり生活できなくなってしまうから。
- エ 繰り返される災害に対して、時間をかけて新しい技術を開発するよりも、短期間に集団の力で災害に対処していく方が効果的だったから。
- オ 災害が多発する環境の中で、個人の力だけでは十分に対処できず、生き残るためには多くの人たちと協力することが求められたから。

問六 ⑤「その協調性によって、日本人は力を合わせて稲作を行ってきた」とありますが、稲作を続けていくにあたって何が重要だったということですか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分たちの利益は二の次にして、集団の決定に素直に従うという協調性。
- イ 災害を乗り越える中で鍛えあげた、周囲の人たちと支えあうという協調性。
- ウ 災害に押しつぶされそうにながらも、不平を言わず譲りあうという協調性。
- エ 納得できないことがあっても、災害にうち勝つためには我慢しあうという協調性。
- オ 集団内で利害が対立した時でも、知恵を出してうまく調節しあうという協調性。

問七 ⑥「ときに批判を浴びてきた」とありますが、日本人へのどのような批判ですか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分たちの集団の中での生産性の向上や協調性を重視するあまり、他の集団との積極的な関わりや個性を軽視しているという批判。
- イ 集団内の他人と協調することを求めるあまり、個性がなく、自分の意見や判断に責任を持たなくなってしまうという批判。
- ウ 稲作を続けることにこだわるあまり、様々な災害を受け続けても今までの農業のやり方を変化させようとはしてこなかったという批判。
- エ 集団に同調しようとするあまり、他人や海外の考え方を取り入れ、その考え方に簡単に流されてしまっているという批判。
- オ 稲作に適した集団を目指すあまり、稲作以外にはほとんど役に立つことのない協調性を必要以上に発達させ続けてきたという批判。

問八 ⑦「泣きわめくこともなく、ときには笑顔でインタビューを受ける」とありますが、インタビューを受ける人がそのようにするのはなぜですか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 日本人は集団内が同質であることを求めているので、個人的な感情を表せばそれを見た人から批判されることになるから。
- イ 日本人は長い歴史における度重なる自然災害の経験があるので、自分が被災した悲しみを押し殺すことにも慣れているから。
- ウ 日本人は思いやりの心を大切にしているので、自分が笑顔を見せることでそれを見た日本中の人を笑顔にしようとするから。
- エ 日本人は相手の心に同調する気質があるので、自分が悲しみを表に出せばそれを見ている人まで悲しませてしまうと考えるから。
- オ 日本人は他人の感情を読み取ることに長けているので、むしろ笑顔でいた方がそれを見た人に心の中の悲しみが伝わるから。

問九 ⑧「悠久の稲作の歴史の中で日本人が育んできた大切なものは失わずに、むしろ海を越えて世界に伝えていきたい」とはどういうことですか。説明しなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「僕(ぼく)(太一)」は、母を亡くし、父と妹の菜月(なつき)とともに、母の生まれ故郷の、九州にある小さな町に引っ越してきた。亡くなった母に似て本が好きな「僕」は、町にある本屋で「中村さん」という女の子と出会う。本屋で出会った際に、おすすめの本を教えてくれる「中村さん」に、「僕」はなぜかなつかしきを感じて、彼女に惹かれていく。次の場面は、中間テストや球技大会などで忙しく、本屋に行く暇もないほどだった「僕」がようやく週末をむかえたところである。

やっと週末になったのに、土曜日は父さんに釣りに誘われた。

当然菜月も行くものと思ったのに、あっさり断られた。父さんは戸惑ったみたいだ。

「読みたい本があるから」

菜月はいった。ずるいぞ、菜月。僕だって読みたい本はあるし、行きたい本屋がある。晩(よる)でみせたけど、知らん顔されてしまった。ふたりで出かけた。

「こんなに水の澄んだ川があるんだなあ」

父さんはしみじみといった。

すっかり秋の気配がしていた。川面は細かく波立って、意外に強い光を反射させていた。無数の魚が跳ねているのかと見紛うほどだった。

「釣らなきゃ」

そうして、^①まるで親の仇(かたき)みたいに釣り竿を振っては餌を飛ばしていた。

母さんが死んで、仕事を変えて、家も売って、とりあえず息子と釣り糸を垂らすくらいしかすることがないだろう。父さんは釣りをしながらよく笑った。ぜんぜん楽しそうじゃなかったけれど。

「こつちへ来て、よかつたかな」

不意に父さんがいつて、こつちというのが今釣りをしているこの川辺のことのようには思えた。でも、きつと違う。こつち。母さんの生まれ故郷であるこの町のことだ。^②小さい頃こそ夏休みには毎年遊びに来ていたけれど、高学年になると毎年ではなくなり、来ても数日しか滞在しなかった。それでも、去年のお盆に遊びに来たのは、虫の知らせだったのだろうか。母さんは東京へ戻って間もなく病気がわかった。

「父さんはどう思う？」

見ると、父さんは困ったような顔をして川の向こう岸を眺めていた。

「俺にはよくわからないだよ。こつちへ来たほうがよかつたのか、がんばって残るべきだったのか」

残るといふ選択肢はなかったのだ。がんばれなかった。父さんだけじゃない、僕も、母さんのいないあの部屋ではがんばれなかったと思う。

「太一と菜月がこつちで少しでも前を向いて暮らせればいいんだが」

「前つてどつち」

笑いながらいうと、父さんもつられて笑った。

「どつちだろうな。そんなこと、考えたこともなかったのにな」

父さん、と僕はいった。

「友達ができただ」

「お、おお、そうか」

父さんは釣り糸を垂れたまま、顔だけこちらに向けた。

「だからさ、こつちが前でいいんだよ、たぶん」

もう父さんの顔は見られなかった。照れくさくて、僕は川の真ん中辺りをじつと見つめていた。

日曜に、ようやく本屋へ行くことができた。

彼女がいると思ったわけじゃない。むしろ、いなくて当然だと思った。でも、文庫の棚の前に、あのなつかしい姿がなかったとき、僕はやっぱり落胆した。

あ。また「なつかしい」と思った。この辺のひとの顔はみんななんとなく似ている。そうつぶやいた父さんの言葉を思い出している。

^④そうか。謎が解けた気がした。彼女はこの辺のひとの顔をしている。つまり、母さんどことなく似ているのだ。だから、惹かれた。恋とか愛とかじゃなく、本能的に惹かれたのだと思う。

「こんにちは」

背後で声がして、振り向いた。

彼女だった。

僕はその顔を見て、すぐに目を逸らした。^⑤どきどきしていた。たしかに、似ていた。みんな似ている、その*範疇を少し超えているような気がした。

「……こんにちは」

彼女の目を見ずに軽く頭を下げる。

「ちよつと久しぶりだったね」

微笑んでいるかのようなやわらかな声が、僕の身体に染み込んでくる。その声までも、似ている、気がした。

「どうかした？」

彼女がいった。僕は黙って首を横に振った。彼女も黙った。目を見合わせないで、ふたりで立っていた。

「読んだよ、重松清」

僕がいうと、彼女はほつとしたように表情を崩した。

『流星ワゴン』が今のところ一番好きだ」

「ああ、よかった」

「それから、『きみの友だち』、『再会』も」

彼女はちよつと声のトーンを上げた。

「そんなに読んだの？ こんな短い間に？」

僕はうなずいた。お小遣いではすべては買えないから、学校の図書室から借りたものも混じっている。

「かあちゃん」

「……え？」

僕は顔を上げ、真正面から彼女を見た。

「『かあちゃん』っていう本もすごくよかった」

半分、嘘だ。すごくよかったけれど、半分までしか読んでいない。いろんな「かあちゃん」が出てきて、涙で最後まで読み通すことができなかった。

「あれから考えたんだけど」

中村さんは「かあちゃん」には触れずに話題を変えた。

「新しいおすすめの本。たぶん、小説は重松清から広げていけると思うから。もし興味があったら、の新ジャンル」

うん、とうなずくと、彼女は先に立って歩き出した。背格好も似ている。女の子というのは、中学生くらいで身長が伸び止まってしまうのだろうか。

彼女に連れていかれたのは、意外な棚だった。

「何、これ、どうして。僕に？」

料理の本が並んでいる。初めての料理。和食の基礎。スープの本。本場のパスタをおいしくつくるには。

「案外、お料理の本って読んでも楽しいのよ」

彼女はくすくす笑った。それから、真顔になって付け足した。

「いつか必ず役に立つから。ご家族のためにも」

「ご家族。やけに大人びたい方だった。彼女は知っているのだ。僕の「ご家族」から大切なひとりが欠けてしまったこと。今度は僕が「ご家族」のためにがんばるときだということ。

落ち着いた表情で僕を見ている彼女に向き直った。

「ありがとう。読んでみるよ」

そうというのが精いっぱいだった。

家に、母さんの使っていた料理の本が何冊もあったはずだ。あれを読んで、何かつくってみよう。母さんほどうまくはつくれないに決まっているけど、

「ご家族」のために、何か、おいしいものを。

「ご家族に、母さんは含まれるのかな」

おそろおそろ聞いてみた。彼女は目を伏せた。

「あたりまえじゃない。母さんはもちろん太一の家族でしょう」

顔は穏やかだったけど、語尾が震えた。

「中村さん」

名前はなんていうの。その見かけない制服はどこ学校のもののなの。

何も聞けなかった。聞かなくても知っていた。家に帰って、おばあちゃんに古いアルバムを借りればわかることだと思った。

「ありがとう」

はつきりと、しっかりと、伝わるように祈りながら僕はいった。彼女はにこにこ笑った。いつもそうしていたみたいに、小さく首を振って。

「こちらこそ」

涙でかすんだ目を上げると、彼女はもういなかった。

〔注〕＊ 範疇……考えの枠組みや範囲。

（宮下奈都「なつかしいひと」※本文を改めた部分があります。）

問一 ①「まるで親の仇みたいに釣り竿を振っては餌を飛ばしていた」とありますが、このときの「父さん」についての説明として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 母さんが死んだことで、ただでさえ気持ち落ちこんでいるのに、ちつとも魚が釣れないことにいらだちを感じている。

イ 母さんが死んで、仕事も変わり、心休まることがないので、この機会に息子との時間を楽しいものにしようとしている。

ウ 母さんが死んだ後、家族のことでいろいろな悩み続けており、なんとか気をまぎらわせようと一生懸命になっている。

エ 死んでしまった母さんのためにも、息子と二人でたくさん魚を釣らなくてはならないと考え、必死になっている。

オ 太一と某月のことを気づかって釣りに誘ったのに、二人が全然乗り気ではなかったのがっかりしてしまっている。

問二 ②「去年のお盆に遊びに来たのは、虫の知らせだったのだろうか」とありますが、ここで「僕」はどのようなことを思っているのですか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 去年のお盆に久々に母さんの故郷に遊びに来たのは、今考えてみると、それとなく母さんの死が予感されたからだだったのかもしれないということ。
- イ 去年のお盆に久々に母さんの故郷に遊びに来たのは、今考えてみると、母さんをいたわりたい気持ちがあつたからだだったのかもしれないということ。
- ウ 去年のお盆に久々に母さんの故郷に遊びに来たのは、今考えてみると、九州で生活していく準備をするためだったのかもしれないということ。
- エ 去年のお盆に久々に母さんの故郷に遊びに来たのは、今考えてみると、家族の大切さを僕に分からせるためだったのかもしれないということ。
- オ 去年のお盆に久々に母さんの故郷に遊びに来たのは、今考えてみると、豊かな自然が僕たち家族を呼び寄せたからだだったのかもしれないということ。

問三 ③「だからさ、こつちが前でいいんだよ、たぶん」とありますが、ここで「僕」はどういうことを言おうとしているのですか。説明しなさい。

問四 ④「そうか。謎が解けた気がした」とありますが、ここで「僕」はどのようなことが分かったのですか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア この辺の人はみんな似ているとつぶやいた父さんの言葉が正しいと分かったので、中村さんに惹かれるようになったのだということ。
- イ この辺に住んでいる中村さんと何回も本屋で会っているうちに、中村さんに対してなんとなく心惹かれるようになったのだということ。
- ウ 中村さんは母さんと似ているのだから、恋とか愛とかいった感情を自分が抱くはずはなく、本能的に惹かれただけなのだということ。
- エ 会うたびに不愉快な思いをしているうちに、自分は母さんと顔がどことなく似ている中村さんに次第に心惹かれていったのだということ。
- オ この近くに住んでいるせいか、中村さんは母さんともどこか似ているので、中村さんになつかしさを感じて心惹かれたのだということ。

問五 ⑤「どきどきしていた」とありますが、「僕」はなぜ「どきどきしていた」のですか。説明しなさい。

問六 ⑥『「かあちゃん」とありますが、この言葉を発した「僕」についての説明として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 中村さんは母さんと似ているので、『かあちゃん』という本をぜひ読んでもらいたいと思い、強くすすめるようとしている。
- イ 本の名前を挙げていく会話の流れの中で、それとなく中村さんのことを「かあちゃん」と呼び、反応を見ようとしている。
- ウ 中村さんと話をするのが恥ずかしいので、冗談交じりに中村さんを「かあちゃん」と呼ぶことで、照れを隠そうとしている。
- エ 学校の図書館にも重松清の作品がたくさんあったのを思い出し、とりあえず見たことのある作品を挙げていこうとしている。
- オ 中村さんが短い間に本をたくさん読んだことに感心してくれたので、自分が読書家であることをさらに自慢しようとしている。

問七 ⑦『「家族」のために、何か、おいしいものを」とありますが、このときの「僕」の気持ちについての説明として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 母さんの使っていた料理の本を使えば、みんな母さんのことを思い出してくれるだろうと考え、何かつくってみようと思い立っている。
- イ 母さんほどうまくは料理をつくれなくても、今家族を支えられるのは自分しかないなので、がんばって料理をつくろうと心に決めている。
- ウ 本に詳しい中村さんが料理の本を選んでくれたので、これを読んで家族のためにおいしいものをつくってみようとする気になっている。
- エ 家族のために自分が料理を作ることが母さんの願いなのかもしれないと考え、これからはできる限り家族を助けようと思意している。
- オ 自分の家族のことをよく知っている中村さんに驚き、とつさに家族のために料理の本を読むと言った以上、もう後に引けないと思っている。

問八 ⑧「顔は穏やかだったけど、語尾が震えた」とありますが、ここでの「中村さん」についての説明として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 僕と話をしているうちに、母さんを失った僕の悲しみを強く感じ、あまりにもかわいそうだと同情している。
- イ 僕が父さんや菜月を支えることは、母さんのためにもなるのだということを強い思いで伝えようとしている。
- ウ 死んでしまったからといって、母さんを家族の一員として考えようとしないうちに僕に対して少し怒りを感じている。
- エ 母さんが死んだことで落ち込んでしまっている僕のことを、どうにかして元気づけてあげようと必死になっている。
- オ 母さんが家族の一員であることはあたりまえのことなのに、それをわざわざ僕が聞いたので不安をおぼえている。

問九 ⑨「はつきりと、しつかりと、伝わるように祈りながら僕はいった」とありますが、ここで「僕」はどういう気持ちを伝えたかったのですか。説明しなさい。

採点欄には

合計

1

⑤

1

問

問二

問四

1

問九

1

問

問

問三

四四

問五

問六

問七

問八

[illegible]